

しているかな、とも思えた。非常に優れたこの本をきっかけに論争を期待したい。自分が尊重している人物が批判された時に、黙ってやり過ごすというのが、日本の戦略だ。

2 柴田寿子『リベラル・デモクラシーと神権政治』スピノザからレオ・シュトラウスまで』東京大学出版会、二〇一〇年

二〇〇九年に惜しまれてなくなったスピノザ研究者の遺稿。スピノザとレオ・シュトラウスの秘教的つながりの分析などとても勉強になる。ただ、「リベラル・デモクラシー」について、十九世紀後半からヴァイマル期のそれと、現在のそれとのあいだに区別が十分ついていない感じがした。ご存命なら大いに議論したいところだ。なんどもご一緒させていたのだが、そのあたりを十分に話し合えなかったのが無念。西洋政治思想史に残る著作であることは間違いない。

3 高橋博己『東アジアの文芸共和国——通信使・北学派・兼葭堂』新典社新書、二〇〇九年

朝鮮通信使に伴って来た学者たちと大阪の碩学たちとの交流を分かりやすく教えてくれる。交流の手段は漢文の筆談。友人の堀田誠三氏に勧められて読んだが、この分野にはまったく無知の、いや無知以下の小生でも分かるような巧みな説明から多くを学んだ。詩文を通じての交流のよさをしみじみと味わう

ことができた。

4 李弥勒『鴨緑江は流れる——日本統治を逃れた朝鮮人の手記』平井敏晴訳、草風館、二〇一〇年

平壤の近くに生まれ、日本統治時代に満州に逃れ、やがて南京、上海を経て中国旅券でドイツに留学した李弥勒（二八九九—一九五〇）の回顧録。ヴェルツブルクやミュンヘン大学で医学を学び学位を取った李弥勒（リ・ミロク、本名は李儀景、弥勒は弥勒菩薩から取ったこと）は、ナチ時代を、理解ある教授の家で生き抜いた。戦後はしばらくミュンヘン大学などで朝鮮語や中国語を教えたが、一九五〇年にミュンヘン郊外で亡くなっている。朝鮮半島の文学の紹介者としてもドイツではそれなりに知られているらしい。ドイツ語で書かれたこの回顧録も、各国語に訳されて広く読まれたようだ。幼少時の村の生活（日本人は墓を暴いて、品格ある陶器を奪っていたようだ）、ソウルの医学専門学校（京城帝国大学医学部の前身らしい）入学試験突破の経験や三一運動に参加した赤裸々な体験など、「日帝時代」の様子が体感できる。ドイツの最初の延坪島が出て来たのには驚いた、というより、どうやら西海岸の舟航のしるべになっているらしいこの島の名前も知らなかった無知を取った。また、ドイツ文学を学びながら、ソウ

ル在住の訳者のこうした仕事に敬意を表したい。李弥勒を研究しているドイツ人のドイツ文学研究者シルヴィア・ブレーゼルの講演を偶然の機会にソウルで聞いてこの朝鮮半島出身の文学者の存在を知った。

宇野邦一
(フランス文学)

1 『インゲボルク・パッハマン全詩集』(中村朝子訳、青土社)
一語一語、一文一文が新しく、不可解で、しかも生氣にみちている。翻訳されることで距離を越えてきた意味のほつれが、もどかしいのではなく、むしろいくえにも裂開の印象をもたらし、思考をゆさぶる。しばらく座右の書になるだろう。

2 佐々木中『夜戦と永遠——フーコー・ラカン・ルジャンドル』(以文社)

ラカン、ルジャンドル、フーコーを稠密に読解し、異質な思考を対比しているのは離れ業と感じたが、これらの異質な思考の結び目はまだ描かれていない。最後にドゥルーズの「ダイアグラム」がその結び目として素描されていることが印象に残る。

3 五盛央『エスの系譜——沈黙の西洋思想史』(講談社)

これも、もうひとつ無意識をめぐる思想的探求の試みといえる。ソシュールについての

博士論文が、このような探求の地平とともにあったことは驚きである。論点は「自然の物質化」対「自然の精神化」ということであり、私にとっては「無意識の唯物論」という遠大な、そして喫緊の課題が浮かび上がる。

5 アンヘル・エステパン/ステファニー・パニチェリ『絆と権力——ガルシア・マルケスとカストロ』(野谷文昭訳、新潮社)
ジャーナリスティックな交遊録の次元を超えて、文学と政治がどんなふうにつながりかに関して、またラテン・アメリカの「友愛」「共同性」「想像力」に関して、未知のことを教えてもらった。

斎藤成也
(人類学)

『他者』としての朝鮮』に続いて、日本近代史の影のまた影の部分を探し出そうとする貴重な著作として読んだ。日中関係のたどった現代史に翻弄されつつ、中国との親密さのなかで、独自の思想的屈折を生きた二人の足跡を洗い出した。著者の『ドレーフス事件——政治体験から文学創造への道程』以来の歴史的な方法の結晶であり、フランス文学者として、二十世紀の作家たちの歴史的葛藤を見つめてきた視線が随所にきらめく。

1 長田夏樹『新稿 邪馬台国の言語——生語復元』学生社、二〇一〇年
敬愛する長田俊樹さんの父上が亡くなられた直後に出版された。魏志倭人伝に出てくる倭国の固有名詞を、著者陳寿が使っていたであろう三世紀の洛陽音で読むとどうなるかという、貴重な試みである。対馬は「とま」、糸

都は「うた」など、現在の音に惑わされないで確定しているのが興味深い。この本に刺激されて白崎昭一郎先生の『東アジアの中の邪馬台国』(芙蓉書房出版、一九七八年)を再読した。

2 松藤和人『検証「前期旧石器遺跡発掘捏造事件」』雄山閣、二〇一〇年
日本の考古学界を揺るがした旧石器捏造事件の発覚から一〇年たった、この問題にいろいろな角度から検討を加えた書。当事者の一人として、事件の様々な内面を抑えた筆致で記している。

3 梅棹忠夫・小山修三『梅棹忠夫 語る』日経プレミアシリーズ、二〇一〇年
梅棹忠夫氏をしるぶ会の会場で購入した。聞き手の小山修三さんがまとめたもの。若い時から、不思議な人だなあと思いつつ尊敬してきたが、最後の著書となった本書は、全体

政治の発見

全8巻 ●四六判/並製 ●本体価格11巻2400円
編集代表 齋藤純一 杉田敦

第1巻 生きる

間で育まれる生「責任編集 岡野八代」

第3巻 支える

連帯と再分配の政治学「責任編集 齋藤純一」

第8巻 越える

境界なき政治の予兆「責任編集 押村高」

つながる

社会的紐帯と政治学
「責任編集 宇野重規」

第5巻 語る

熟議/対話の政治学
「責任編集 田村哲樹」

第7巻 働く

雇用と社会保障の政治学
「責任編集 宮本太郎」

第2巻 守る

境界線とセキュリティの政治学
「責任編集 杉田敦」

http://www.fuko.co.jp

風行社

千代田区神田小川町3-26-20
tel. & fax. 03-6672-4001

に彼のニヒリズムがほの見えてくる。彼自身
が二〇六頁でこれが自身の哲学だと開陳して
いる。さようなら梅棹さん。

4 鶴見俊輔『竹内好——ある方法の伝記』
岩波現代文庫、二〇一〇年

これまでまったく知らなかった人物の伝記
を読んでみた。私は彼のようなぶれない人が
好きだ。今後彼の著作をいろいろと読んでみ
たいと思った。

5 中島敦『光と風と夢』筑摩書房、一九四
二年（青空文庫、二〇一〇年）

電子書籍で古典が身近になった。しかも安
価に読める。敦の読みやすい筆致で、サモア
における宝島などの作品で知られるR. L. S.
の晩年が語られる。芥川賞候補作品になっ
たらしい。このほか、中島のミクロネシアでの
体験をもとにした「南島譚」もいい。中黒を
多用するのにはちょっと抵抗があったが。

田崎晴明

(物理学)

1 サイモン・シン、エツァート・エルス
ト『代替医療のトリック』（青木薫訳、新潮
社）

私自身「ニセ科学」批判に関わっているこ
ともあり必読と思いに手に取った。著者らは、
鍼、カイロプラクティック、ホメオパシーな
どの代替医療の「治療効果」が本物なのか単

するかのようショッピングモール特集もさ
ることながら、第2特集のパターン・サイエ
ンスについての座談は、創造概念の再考にま
で至り示唆に富む。

小松美彦

(科学史・生命倫理学)

1 ロベルト・エスポジト『近代政治の脱構
築——共同体・免疫・生政治』（講談社選書
メチエ、二〇〇九年）

現代世界の最大問題をナチスの延長線上の
「生政治」、すなわち政治の生物学化・生物学
の政治化と捉え、その歴史の実相について
「免疫化」概念を中心に据えつつ徹底分析し
た。しかも、決して諦めることなく、共同
体・自由・人格などの所与の概念の根本的な
再考を通じて、「生政治」「死政治」の超克を
目指す。やはり、徹頭徹尾拘るべきなのは、
身体と「ただ生きていく」という事象」なの
だ。

2 金森修『生政治の哲学』（ミネルヴァ
書房、二〇一〇年）

フーコー、アレント、ネグリ、アガンベン
などの錯綜する生政治論を整理した。ことに
アガンベンをめぐる体系的解説は重厚であり、
わけでも難解な神学議論に対して鋭い解釈を
施した。その上で、生政治論を考究する者は
現在進行形の「生物学的認識の政治」への応

なる精神的な効果（ラセボ効果）なのか、
客観的なデータを元に冷徹に分析する。「ま
じめに試して効果があるか否かを調べる」こ
とに尽きるのだが、本書を繙けば、これが驚
くほどデリケートな問題であることがわかる
だろう。そして、多くの治療法について肯定
的とは言えない結論が導かれていく。日本で
も代替医療に過度に依存したため通常医療を
受ける機会を逸して命を落とした事例が問題
になっている昨今、多くの人に読まれるべき
本だ。

代替医療の推進者の多くが「現代の医学は
非人間的だ」と唱える。これほどに浅薄きわ
まりない言説が堂々とまかり通る現実が悲し
い。人間についての膨大な経験の蓄積から普
遍性の高い事実を抽出し、それをもとに個々
の患者を手厚く治療し、失われていたであ
る数多くの命を救っていく——この壮大な営
みほどに「人間的な」ものが他にあるという
のだろうか？

増田 聡

(音楽学)

1 輪島裕介『創られた「日本の心」神話
——「演歌」をめぐる戦後大衆音楽史』（光
文社新書）

2 渡辺裕『歌う国民——唱歌、校歌、うた
ごえ』（中公新書）

用」に論及せず、逆に「生物学的認識の政治
への応用」を実は扱っている者は生政治論に
関心が薄いという傾向にあつて、反自然主義
の立場から両者を架橋し、「ポスト・アガン
ベン期」の問題構成を展望した。

3 石原俊『殺すこと／殺されることへの感
度——二〇〇九年からみる日本社会のゆく
え』（東信堂、二〇一〇年）

私たちに今まさに問われているのが「殺す
こと／殺されることへの感度」であることを
多面的に訴えた、小型だが濃密な現代日本論。
私たちのへいま・ここを歴史化・社会化し、
沖繩／硫黄島、派兵、人種主義、貧困などの
政治経済的な問題と、「臓器移植法」改定や
「尊厳死法案」とを、一連の新しい主義政策
として結びつけた意義はとくに甚大。

4 村田翠『まだ、間に合うのなら。——改
正臓器移植法について考える』（文芸社、二
〇一〇年）

「本人の意思が不明でも家族の承諾だけで
臓器提供できる」とした「改定臓器移植法」
をめぐるスリムな批判的随筆。評者は当該問
題に関する一般和書はほぼ読んできた心算で
あるが、専門用語をほとんど使わぬ平明かつ
言葉豊かな文章で、科学・必要と欲・効率主
義・死別の悲しみ等の事の本質に下降したも
のを他に知らない。「剥き出しの奴隷制」（傍
点評者）なる表現はもとより、「科学的」と

同業の友人や師といった体内の著書を挙げ
るのは気がひけるので控えたのだが、それ
でも1、2は取り上げざるを得ない。大衆文
化研究の中で構造的に見過こされてきた対象
のひとつ、演歌について、綿密な資料調査に
よって読み直す1、十九世紀芸術音楽を範例
とする音楽研究のバイアスを、唱歌の諸相を
例として端的に指摘する2。ともに、研究に
「値する」対象と「ふさわしい」視点へと研
究者自身を水路づける言説編制への健全な懐
疑と、異なる語り口への建設的な提案を併せ
持った快作である。

3 久繁哲之介『地域再生の罫——なぜ市民
と地方は豊かになれないのか？』（ちくま新
書）

4 高橋敏『清水次郎長——幕末維新と博徒
の世界』（岩波新書）

5 東浩紀編『思想地図β』（コンテクチュ
アズ）

「まちおこし」という言葉に促される類型
的な諸実践に違和感を拭えないまま、その種
の議論や実践に触れる機会が職務上多いのだ
が、3はそのような違和感に言語化の端緒を
与えてくれた。4は浪曲というフィクション
により構築されてきたイメージが、史実と取
り結んでいる関係について考えさせられた。
5は年末になって届いた野心的かつ刺激的な
新雑誌。3の実践的な関心を別側面から照射

は、人間が人間を内からも外からもよりよく
知ろう、より深く探究しようという知的活動
に与っている状態を指すのであつて、それ以
上でも以下でもない」と喝破する経歴非公表
の著者は、失礼ながら何者ぞ。

5 村瀬学編『編集者——小川哲生の本——わ
たしはこのような本を作ってきた』（非売品、
二〇一〇年）

昨春で四〇年間の編集者生活に暫定終止符
を打った小川哲生は、後半の二〇年間すなわ
ちJICC出版局（現宝島社）と洋泉社時代、
自身が手掛けたすべての書籍に関して挨拶・
紹介文を作成し、パブリシティ先に配布しつ
づけてきた。その大半を纏めたのが本書であ
る。四〇〇頁を超えるそこには小川哲生の生
き様が詰まっている。小川を口説き落とした
企画・編者は、彼の「最後の仕事」「食べ
る」思想」の著者・村瀬学。二人に対しては
ひたすら頭を垂れるしかない。

佐々木正人

(生徳心理学)

1 加地大介『穴と境界——存在論的探求』
（春秋社、二〇〇八年）

二〇一〇は穴の年。チリ鉱山地底七百メー
トルの穴に世界が注意した。加地は「非質料
的実体」である穴は、必ずしもホスト（穴を
もつ物）に依存しないと云う……。とすれば、